

日本のトップサッカーチームにおける情報分析活動の現状

The present conditions of the information analysis activity in the Japanese top football team

1K06A0534

指導教員 主査 倉石平先生

大脇 友里佳

副査 堀野博幸先生

【緒言】

近年の社会は様々な情報であふれている。スポーツにおいても情報は重要であり、ボールゲームでは、ゲーム分析を中心とした情報分析活動（テクニカル活動）が行われている。情報を収集し、分析し、反映させるテクニカル活動者はバレーボールやバスケットボールなどで近年注目を浴びている。サッカーにおいても、ゲーム分析を中心としたテクニカル活動がナショナルチームレベルで行われている。試合の映像から情報を収集する方法が一般的であり、収集の方法には様々な先行研究がある。しかし、サッカーのプレーには数値化が困難なものもあり、数値と実際の試合内容が必ずしも一致するとは限らないなどの問題点もある。そして、実際の現場ではどのように行われているのか不明瞭である。本研究では日本のトップサッカーチームの現場でのテクニカル活動の現状を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

Jリーグに所属する関東圏のチームのうち3チームのテクニカル活動者に対し、1時間程度のインタビュー調査を、事前に制作した質問項目をもとに行った。調査期間は2009年の11月上旬から下旬である。

【結果】

A.テクニカル活動者について...3者とも選手としてのプロ経験はなかったが、サッカー経験

とコーチ経験はあった。テクニカル活動を専任で行っているのが2名、1名はアシスタントコーチと兼任であった。対戦相手のスカウティングが優先されるが、練習などの時間はチームと行動を共にし、他のテクニカル活動はそれ以外の時間に行うのがほとんどであった。

B.テクニカル活動について...映像の入手方法は、Jリーグから配布されるスカウティングビデオとCS放送を録画したものが主であった。2名はデータと映像が関連付けられているシステムを導入しており、映像のみならず、映像以外のデータも同システムから入手していた。他の1名も、映像以外のデータのみを同じ会社から購入していた。主観的データに重きを置き、客観的データは裏付けとして使用していた。試合中のリアルタイムフィードバックは行っていなかった。

C.テクニカル活動についての考え...現状のやり方やツールに特に不満はないという。テクニカル活動の今後の展望については、Jリーグが現状のままだったらこのままで良く、海外のビッグクラブと戦うならば専任のチームを組んでも良いという意見、専任を置くべきという意見、コーチがやるべきという意見があった。

【考察・結論】

Jリーグにおいてもテクニカル活動が行われ、テクニカル活動者が存在することが明らかにな

った。彼らはサッカーの知識を豊富に持ち、サッカーを観る眼であるコーチの眼でゲーム分析していることが明らかになった。自ら試合内容を数値化することはほとんどなく、情報収集能力よりも、情報分析能力と、それを反映させる能力が重要であることが明らかになった。テクニカル活動を行うためにはコーチングを学び、コーチの眼を養うべきである。今後のJリーグのテクニカル活動については、チームとして情報を集め、コーチの眼を持った者が正確に試合を分析し、チームに反映させる必要がある。監督をはじめとする現場の人間がそれを活かす組織力を持ち合わせていれば、専任や兼任など、チームによってテクニカル活動者のあり方が違っていても良いと考える。